



TITLE:

<批評・紹介>敦煌秘籍留真新編

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

---

CITATION:

日比野, 丈夫. <批評・紹介>敦煌秘籍留真新編. 東洋史研究 1950, 10(6): 505-507

ISSUE DATE:

1950-02-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145866>

RIGHT:

## 敦煌秘籍留眞新編

民國三十六年九月國立臺灣大學發行  
上下二冊、コロタイプ版二百九十葉

元臺北大學教授神田喜一郎氏が、昭和十年から二箇年のフランス遊學中、故ペリオ氏の將來にかかるパリ國民圖書館所藏の敦煌遺書を自ら撮影して歸られたのは、すでに學界周知のことである。古い國の由緒ある圖書館などはいろいろな困難が根強く、外國人にとつて貴重圖書の撮影など容易ならぬところを、苦心慘憺、多數の善本をフィルムに收められた土産談は、當時聞くものをして流石に先生ならではの感に打たれたものであつた。歸朝後、早速そのうちの逸品六十三點を選擧して寫眞版に附し、『敦煌秘籍留眞』上下二巻を編して知友に頒たれた。その撮影の正確にして印刷の鮮明なる、まことに留眞の名に背かぬものであつた。

しかし右書に收められた影片は、各巻の代表的部分一葉乃至二葉であつて、全貌を窺ふことは困難である。そこでさらに三十三點を選んで全巻をコロタイプ版二百九十葉に收め、これに詳密なる解説を附して刊行せんとされた。寫眞版はすでに内地で印刷が成つて臺北に送られ、未裝訂のまま大學の附屬圖書館のうちに積まれてあつたのである。しかるに東亜の戰雲は日に濃く、先生は昭和二十年一月内地に引上げられた。そのとき寫眞版の複製などもつて歸られなかつたのは、いふまでもなくそのものとフィルムが印刷のため内地におい

てあるからであつた。ところがあにはからんや、それは京都の印刷工場でいつのころからか紛失してしまつてゐたのである。パリ遊學中の苦心の水泡に歸した先生の失望落膽は推して察すべきではないか。

しかし臺北が中華民國に接收され、國立臺灣大學となつてから同大學の手によつてこれが整理され、「敦煌秘籍留眞新編」の名で刊行されるといふ朗報が、大學關係の引上げ者によつて報ぜられ、それに附せらるべき許壽裳氏の序文が國立臺灣大學校刊の第二第三第四期（民國卅六年十月十一日）に分載せられた。また寫眞版は爆撃等のために一部散亂してをつたので、桑田六郎、中村忠行兩氏が前後して整理に當り、不足部分二九二六枚を影印補充したといふこと、一部二冊、四百部を刊行すべきことなどが報ぜられてあつた。昭和二十三年九月、つひにこの書一部が引上げの日比野信一教授によつて先生の手許に届けられたのである。既報のごとく、それは立派な二厚冊で、補充された寫眞も存外によく、卷頭には許氏の序文に先立つて校長陸志鴻氏が序を書いて神田先生の功績を稱揚してゐる。

左にその目録（數字はペリオ目録番號）のみを記せば、

## 上卷

古文尙書 夏書禹貢

（三四六九）

同 商書盤庚上中

（三六七〇）

同 商書盤庚、說命、西伯戲象、微子

（二六四三）

- 同 周書洛誥、多子、無逸、  
君奭、蔡仲之命 (二七四八)
- 同 周書秦誓 (二九八〇)
- 今字尙書 虞書堯典 (三〇一五)
- 同 周書多方、立政 (二六三〇)
- 論諸集解 魏何晏撰 微子、子張、堯曰 (二六二八)
- 論語義疏 梁皇侃撰 學而、爲政、八佾 (三五七三)
- 孝經注 未詳撰人名氏 三才、孝治、  
聖治 (三三八二)
- 禮 記 漢鄭玄注 大傳、少儀 (三三八〇)
- 春秋穀梁傳集解 晉范甯撰 自哀公六年  
至十二年 (二四八六)
- 春秋左氏傳集解 晉杜預撰 自襄公十八  
年至十九年 (二七六七)
- 史 記 晉蔡世家、伯夷列  
傳、燕召公世家 (二六二七)
- 帝王論略 唐盧世南撰 (二六三六)
- 下卷
- 老 子 上篇道經 (二五八四)
- 老 子 下篇德經、附十戒經 (二三四七)
- 老 子 唐景龍三年鈔本 (二四一七)
- 老子化胡經 唐天寶十載鈔本 (三四〇四)
- 老子開題 唐成玄英撰 (二三五三)
- 莊 子 晉郭象注 大宗師 (二五六三)

- 同 同 外物 (二六八八)
- 道 書 未詳書名 (二二一三)
- 同 同 (二二九六)
- 文 選 揚雄、劇秦美新論、班固典引 (二六五八)
- 同 王儉褚淵碑文 (三三四五)
- 還冤記 北齊顏子推撰 (三一二六)
- 舞 譜 未詳撰人名氏 (三五〇一)
- 毛詩音 晉徐邈撰 大雅十六、十七、  
十八 (三三八二)
- 楚辭音 隋釋道騫撰 離騷 (二四九四)
- 爾雅注 晉郭璞撰 釋天、釋地 (二六六一)
- 釋丘、釋山、釋水 (三七三五)
- 文選音 未詳撰人名氏 任昉王文惠集序  
千寶晉紀總論 (二八三三)
- 一切經音義 唐釋玄應撰 (二九〇一)
- これらは悉く未だかつて寫眞版としては公刊されなかつたものである。一體、敦煌古書の寫眞版としていままで刊行されたものでは、故羅振玉氏の「鳴沙石室遺書」「同佚書續篇」「鳴沙石室古籍叢殘」等二三があるにすぎない。やはり同氏の「敦煌石室遺書」「敦煌石室碎金」、蔣斧氏の「沙州文錄」、劉復氏の「敦煌掇瑣」等は、いづれも鈔録を活字に附せるものであつて、文字の錯誤あるを保しがたい。本書が文字通り

留眞なる點において、内容の厳選されてゐる點において第一等の貴重なる資料であることはいふまでもなからう。中でも皇侃の論語義疏、成玄英の老子開題、郭璞の爾雅注の三七三五號の部分などは先生の調査の際、始めて發見確認されたものなのである。王重民氏の「巴黎敦煌殘卷叢錄第一輯」巻一には、この論語義疏のことを述べてこれが久しからず神田氏によつて影印されるであらうと記してゐる。

内容の紹介のごとき到底私のなしうところではなく、いまここには本書刊行の來歴を紹介するに止める。ただ本書のわが國に渡來することのおそらく少いであらうことを遺憾とするものである。思へば中國からフランスに渡り、それが日本人によつて撮影され、つひにまた中國人の手によつて刊行されるといふ、數奇な運命にもてあそばされる敦煌の遺書ではある。敦煌遺書發見五十年の紀念すべき年頭に當つてこの一文を草しえたことを喜ぶ。二四・一・一五「日比野丈夫」

江上波夫著

ユウラシア古代北方文化

昭和二十三年八月

京都、全國書房刊

A5判、四〇二頁

圖版三四葉 價三五〇圓

城廓都市を中心に華かなる物質文明を發展せしめし南方農耕定着民族と草原荒野を舞臺に鬭争的な集團の力を發揮せし北方遊牧民族が抗争することにより、稍ともすれば停滯し陥らむとする夫々の固有社會が相互に刺激を蒙りて發展する

てふ史觀は、夙く十四世紀イスラムの歴史家イブン・ハルドゥーンにより、北アフリカの諸民族に就き示唆せらるるところあり、故白鳥庫吉博士は、ユウラシア大陸に跨るウラル・アルタイ語系諸民族全般に亘る包括的研究の結論として、東洋史の發展の外的契機ここに在るを提唱せられたり。本書は、博士の高弟にして半生を匈奴史研究に捧げられし江上教授が、雄大なる史觀の下に、博士の所論を更に綿密に分析し、その方法論上の缺を補ひて一步を進められし、諸論文を纏め、ユウラシア古代北方文化史研究の導標を打樹てられしものなり。

爾來、北方民族の文化は、唯南方諸民族に顯著なる影響を與へし場合にのみその價值を認められ、研究の對象とせらるるも、爾餘の場合には問題の外に置かれ、華かなる對外發展の場合に、一時的に急速に文化の進展見らるるも、之を過ぐれば、再び元の低文化の生活に還元しその文化停滯す、との史觀が支配的なりき。本來それ自體のみにて發展せる文化の如きは存在し得ず。必然的な内部よりの發展の契機と、可能的なる外部よりの發展の契機が存し、之を結合するに、偶然的の機ありて、始めて歴史的事件生ずるなり。本來、平和なる純遊牧生活を楽しめる匈奴が、西方アールヤ系諸族の鑄銅技術と青銅武器を受容すると共に、好戰的な騎馬民族と化し、華夏民族と争ふに至りし如き（九一—一三頁）、又全盛期の匈奴の軍隊が、單于の總帥下に、軍備を整備し、軍制の一部に於て、封建制を採用せしは、漢の降將を通し、中國の制に倣